

ソ連見たまま 聞いたまま

千葉県 溝口菊雄

昭和二十(一九四五)年八月十五日、ハルピンで敗戦の詔勅の放送を聞き、悲憤の涙した私は、その涙が渴き切らぬ間に山下高級参謀の命令で十九日、ソ連軍軍使一行をハルピン飛行場に出迎えた。二十三日、特務機関本部(元英国領事館)に軟禁され、続いてハルピン監獄に投獄され生命に對する不安と物凄い南京虫の大軍に襲われ睡眠不足に悩まされた。

一週間程して貨車に乗せられ、今なお、日本軍兵士の死体が黒々と無数に横たわる東満の戦場跡を通じて、ソ連極東軍司令部のあるウオロシロフまで荷物のように運ばれた。着いたのは敗戦から一カ月程たった九月十三日のことであった。

集合させられたのは、主として特務機関員、憲兵隊員、裁判官、協和会員とこれらの機関に協力

したと思われた中国人、朝鮮人、蒙古人、白系ロシア人達千人程であった。

ここで約三カ月程、晩秋から初冬にかけて寒さと飢えと狭さと取り調べに悩まされ続けた。

こうして敗戦から昭和三十一年十二月三十日復員するまで十一年四カ月、ソ連で抑留生活を過ごすことになり、しかもその間、ソ連の東西南北と転々と各地を移動させられ、その上、懲役二十二年の罰を受ける羽目になった。

十二月九日だったと思うが、收容所の職員が「名前を呼ばれた者は荷物を持って外に出ろ」という。楽道家たちは、帰国だろうと喜び、悲観論者たちは、強制労働のため移動させられるのだろうと悲しい顔をした。

とにかく收容所の殆んどの人が五十人ぐらいずつ貨車に詰め込まれた。

これから一カ月近くの間、起居することになる貨車の構造と機能について、若干説明をしておきましょう。

貨車の中は三つに分かれ、前部と後部は二段の棚になってこれが有難いベッドで、中央部分は共通の広場で、時には食堂であり、時には便所でもあった。大、小便はすべて車内で済まさなければならなかった。小便は一方所だけ車外に樋が通してあり車内にある部分の上部が開いていて、そこに向かってすると外へ流れる仕組みになっていた。大便は皆の目の前で共通広場でするわけであるので、できるだけ皆が寝ている間にするようにした。車内といっても零下三〇度や四〇度あるのだから匂いなど殆んどない、すぐに凍って石ころのようにコチコチになってしまう。一人一人の量は僅かでも毎日五十人程の人がするのだからどんどん溜り困って寝台の下に詰めたものです。

貨車の内側は霜が真っ白になっていた。五十人の吐く息の水分が凍って付着したものだ。十分に貰えない水の不足を補うためにその霜を削って集めて舐めたが、渴をいやすには何の役にも立たなかった。

貨物列車は、そんな事などおかまいなしに一面白銀の広野、酷寒のシベリアを西へ西へと進んだ。列車が時ならぬ時にしかも駅でもない所に停った。貨車の隙間から覗くと線路のすぐ傍の雪を数人の者が掻き分けている。どこかの車両で死人が出たようだ。

穴を掘ろうとしても凍り着いた土は岩のように固く、掘ることが出来ないので雪を除いただけで亡くなった人を埋葬するため墓穴を掘り始めたのだった。埋葬が終わると塔婆の代わりに何の印を立てるでもなく念仏をあげる者もなく名も知らぬ場所に置きざりにして列車は再び西へ西へと走り続けた。

目的地へ着くまでの間に十数人が車中で亡くなり同じように名も知らぬ地に淋しく葬られた。

車内で配給される食事は黒パンと砂糖と水だけだった。それも一本が二キロぐらいのパンを四、五本くれるのだ。分けるのが一苦労だった。水分の多い黒パンは煉瓦かブロックのようにカチカチ

に凍っているのである。しかも分配するために包丁が渡されるわけでもない。元々刀物の所持は禁じられていたのでパンを分けることにはホトホト苦勞した。しかし「窮すれば通ず」という諺を聞いてはいたがやはり困れば何とかなるものだと思う。うまいことを考え出した人がいた。それは貨車の側板を固定するための長い鉄板、幅五センチ、厚さ三ミリぐらいの鉄板を折って包丁の代りに使おうというわけだが、頑丈に螺旋で留められておつてどうにもならない。ようやく探してびよりの緩んでいる所を見付け折りにかかった。しかし厚い鉄板を何の道具もなく不自由な姿勢でこつそりとやらなければならぬという悪条件下の仕事だったから大変な苦勞だった。何人かが交代してようやく成功した。これからはパンがうまく分けられるということのみんなホツとした。たしかに前よりは分けるのに便利になったといつても、刃も付いていない三ミリも厚さのある鉄板でカチカチに凍ったパンを切ることは容易なことではなかつ

た。切ったパンだつて均等に分けられる筈がない。そこで、分ける時、順番を決め、今日一番に取つた人は明日は最後に取り、昨日の二番が今日の一番を取るといふようにした。皆納得してこの約束を破る者はなかつた。

乗車して一週間か十日程してイルクーツクに列車は止まつた。「全員降りろ」という命令で車から降ろされた。何かと思つたが何の説明もなく、どことなくただ歩かされた。しばらくして大きな建物の前に着いた。この建物は入浴場であつた。衣類は高熱釜に入れるという指示があつた。次は入浴だが入口で縦二センチ横三センチぐらいの石罅が一人一人に渡された。入浴といつてもシャワーを二、三分浴びるだけであつた。しばらくすると高熱釜から衣類が出された。

汗と垢と埃のにじんだ衣類は洗濯もしないで高熱を加えたので、ボール紙かベニヤ板でも作つた衣類のようにながばになつていて体に着かずシベリアの寒風が肌と衣類の間を通り抜けていく

のが感じられた。

この高熱殺菌と入浴とは風の発生を未然に防ぎ発疹チフス等の伝染病を予防するためだと知らされた。広いソ連では囚人を輸送する際には必ず通る処置であるとも聞かされた。こんな処置が終わると再び貨車にのせられた。

乗る時に我々の乗ってきた貨車を見て驚いた。車は有刺鉄線でぐるぐる巻きにされている上に、先頭車と後尾車の屋根の上に機関銃が据付けてあり兵隊が伏臥の姿勢でいつでも発射できる態勢になっていたのである。

一方、稀に日本軍の捕虜の乗った貨車を追い越すことがあったが、驚いた事には彼らの乗った貨車の扉は開放して兵隊達はソ連領内であるにもかかわらず銃を持ち剣を差していたのである。

両者の扱いを比較してみた時、ソ連が我々に対して何を考え、どう扱おうとしているのだろうかと予想すると前途にただならぬものを感じないわけにはいかなかった。

ウラルにて

ハバロフスクを出発して二十八日目、着いた所はタブダという所であった。スベルドロフスク東北東三百キロメートル程の所にある淋しい収容所だけの町だった。

収容所まで歩くことになったが、雪が膝の上ぐらいある。その上、抑留以来の食糧不足と運動不足の影響が出て思うように歩けない。女の警備兵が、遅いといって「ダワイ、ブイストロー、ブイストロー」と怒鳴り、あげくの果てに銃を逆に持って銃床で背中や尻を殴るのである。殴られたって体が動くようになるわけではなかった。敗戦以来、ロシア人が侮辱する言葉は何回、何十回か聞かされ、腹立たしい事はあったが、この時程口惜しく敗戦の悲しさを感じた事はなかった。

収容所は、タブダ川の近くにあり、元来ロシア人の収容所であつたらしい。しかし我々が行った時にはソ連の囚人もドイツ人の捕虜もいた。作業は、まだ川が凍らない中に上流から流して来た材

木が貯木場にぎつしりと凍りついている。この木材を何台もある鉤のついたコンベアにとびで引つけてのせ、大小や木の種類に区分して下に落とし、落ちて来た木材をきちんと区分に従って積み上げる仕事であった。

直径が、細い物で三、四十センチ、太い物になると七、八十センチから一メートル近くもある。長さも五、六メートルもあるのでその重いこと、殆んどこんな重労働をしたことのない慣れない者達にとっては物凄い重労働である。日本人の中には落とそうとした木が逆に自分の方に転がってきて両大腿部を骨折をした人も出た。

ロシア人の囚人が一緒だったということを書いたが、彼らは実によく働いていた。仲間同士話をするでなく、ただ黙々と働き続いていた。噂によれば独ソ戦の際、ドイツ軍の捕虜になった将校集団だということだった。

女の囚人も一緒に仕事をしていた。収容所内では建物は柵によって区切られていて行き来は

できないが作業場では一緒に仕事をしていた。私はこの頃、胸が痛んで苦しんだ。昭和十九年の十二月から湿性肋膜炎でハルビンの陸軍病院に入院していた。私は二十年の五月、ソ満国境風雲ただならぬものがあるので退院して来るようにとの部隊の命令で回復しないまま退院した。そんな関係で抑留されてからも体の調子はあまり好ましくはなかった。

作業を休ませてもらおうと思い診断を受けに行った。「胸が痛いからみてほしい」というとソ連の軍医がラツパ型の聴診器を一、二度胸にあてて聴いていたが、「衛生兵！ この患者にヨーチンを胸に塗ってやれ」「お前は明日は作業に行け」と素っ気なく言った。

いささかしやくに触った私は「あなたは藪医者（ソ連では馬医者という）だ、本人が具合が悪いというのだから、どこが悪い所があるのだ。まして最近まで入院していたんだからおさらのことだ。藪医者奴！」と言ってしまった。すると「ザ

クリュチヨンヌイ（囚人）のくせに生意気なこと
を言うな、決していい事はないからそう思え」と、
かの軍医殿が怒鳴り返してきた。

そして私は次の日も次の日も胸の痛みを我慢し
ながら作業に出ている。

その頃、ハルビンの陸軍病院で一緒に入院して
いた小林大尉や河内山大尉がこの収容所内の病院
で次々に死んで行くのを知り、私も先があまり長
くないと感じた。

一方、収容所内では、この収容所から出ている
日本人の伐採要員がすごく疲労したので交代要員
を出すことになったが、日本人は体力が無いので
外の民族から出すという噂が流れた。

二、三日して呼出しがあった。

「次に呼ぶ者は所持品を持って中庭に並べ」、
次々に名前が呼ばれた。みんなロシア人の名前で
あった。殆どどの日本人は噂が本当だろうと思っ
ていたからそんなにも気にもしなかった。勿論私
もそう思っていた。まして体の具合が悪いといっ

て診断を受けに行つた者を重労働の伐採に出すは
ずがないと信じていた。呼び出しはまだ続いてい
た。終わりに近づいた頃自分の耳を疑った。私の
名前が呼ばれたのである。ロシア人の中に日本人
である私が一人だけ入っている。瞬間、私の頭を
よぎったことがある。数日前に軍医が「お前には、
いい事はないぞ」と言ったのが思い出された。

日本人仲間にも励まされ別れを告げ総勢三十人程、
雪深い道を駅まで歩き車に乗せられた。

また、ここでびっくりさせられたり戸惑ったり、
生まれて初めて囚人護送車というのに乗せられた
のである。暗くて、しかも周囲を見回す程精神
的な余裕もなかったが、進行方向左側が通路にな
って右側がいくつかの小部屋に区切られてい
た。その一部屋は定員四〜六人ぐらいである。そ
こへ二十五人も詰め込まれたのだから、たまった
ものではない。苦しくて苦しくて気の遠くなる程
で、早く着いてくれないかと祈るばかりであった。
やっとの思いで、とにかく収容所に着いたが、あ

まりの苦しさで何時間汽車に乗ったのか、何という駅についたのか未だに思い出せないが、とにかくウラル山中であることだけは確からしい。

到着した次の日あたりから早速作業に出された。不思議にもカンボーイ（警戒兵）なしでの行き帰りだった。聞いてみると逃げたいものは逃げるがよい、どうせ逃げおおせる者はいない。逃げおおせる前に狼に食われてしまうからだということだった。そういえば、作業をしても、あつちでもこつちでも狼の遠吠えが不気味に聞えていた。そしてまた、一人も逃げたということを知ったことはなかった。

前置きが長くなったが、ここでの私達の仕事はシベリア杉の伐採であった。まず五十センチ程積った雪を掻き分け、二人曳きの鋸で切り倒した枝を落とし幹を四く五メートルに切るのであるが、今でも羨しく思っていることがある。それは、この長さに切った丸太が実に綺麗に育っていて、どつちが元で、どつちが先かわからない程太さが変

わらないのである。こんな寒い所にこんな木が育つのか、羨しかったものである。

こんな木を次々に倒していくのはロシア人達の仕事で、寒さにも雪にもそして仕事そのものにも慣れた連中にとつては当然の仕事であった。私は専ら彼らが倒した木の枝を払って焼き払うのが仕事であるが、三十人の作業員の倒す木を一人で枝を払って燃やすのだからとてもではない。枝といつたとて十や十五センチの太さがあり、長さだつて四く五メートルはある。しかも五十センチもある雪の上を一か所に集めて燃やすわけだが、それも切ったばかりの生の木だ。火を着けるだけでも大変だ。ようやく火が着いたとしても葉っぱと極く細い枝だけが燃えるくらいで太い枝なんてそのまま残ってしまう。監督が回って来て邪魔になるから燃やしてしまえという、だからといって生木は簡単には燃えてくれない。こんな仕事で毎日がくたくただった。タブダの収容所の医者に「貴様のためにならねえぞ」といわれたことの意味がわ

かつてきたように思われて来た。それでも前にも書いたが、私達の作業班は私を除いて全員がソ連人であつたので作業の能率は極めて良好で、食物はノルマに依じて与えられることになっているため、食糧には事欠かなかつた。それでもこの収容所には先発の日本人も沢山いたので、私の受け取るパンを見て「あなたのパンは何人分ですか」と訊ねられることが縷々あつた。「二人分ですよ」と答えると羨まれた。

しかし私には私なりの苦勞があつた。朝食には、よく**豌豆**^{えんどうまめ}の汁が出たが、知る人ぞ知る、この汁は豆は下に沈み、上は塩水だけになる。そこで配給係だが、ロシア人がやっていて、日本人と見ると上水だけを注いで、ロシア人だと見ると下の実の多い所を注ぐのである。そこで、なるべく顔を見られないように上手に並んでロシア人と思わせ、下の豆の多い所を注いでもらう事に苦勞した。また、夕食には鮓の塩漬けの二つ切りの切身とピカントという馬鈴薯をすり潰して大きな鉄の枠型に

入れて焼いた物を日本の餅ぐらいの大きさに切つたものが配給になつた。大きな容器に入れるので薄い所と厚い所ができるが、厚薄の加減はなく同じ大きさに切つてあるので誰もが厚い方が欲しかつた。ここでもまた、生きていくためには一苦勞が必要だつた。この両者共配給係がロシア人で、日本人と見ると、鮓は食べる所の少ない頭の部分を渡し、ピカントは薄いのを配るのである。汁の時と同様、食堂での座席がいつも決まっているので、ロシア人の腰かける席にもぐり込んで暗い灯では識別のわからないように灯を背にして座ることを考えた。こうして鮓は肉の多い尻尾の方をピカントは厚い方をもらうことに成功した。

自分の事ばかり書いたが、日本人とは作業の種類が違い場所も違つたのでなかなか会う機会もなかつたが、私がロシア人作業班に一人いることが足手まといになつたのか理由はわからないが間もなく私は日本人の作業班に回された。

日本人はもともと全員がこの収容所に伐採要員

として送られて来たものであるが、雪の深い山中で慣れない仕事の上、抑留以来の食糧不足からくる栄養失調で疲労困憊その極に達していたが作業は休ませてくれず、それでも軽くしたつもりで薪切りをさせた。疲労しきった日本人にとっては、それは決して軽減にはならず、重い負担であった。ソ連では薪を切るにも二人曳きの鋸で向かい合って曳くのであるが、一方に引くと、そこでこっくりこっくりと眠り、監督から怒鳴られて、反対側に押す、そこでまた、こっくりという状態で、一日一立米、二人で二立米のノルマなど達成できるわけがない。一日かかってやっと一つか二つが、精いっぱいであった。

ノルマが達成されなければ食糧は減らす、これはソ連社会では当然の事であった。食糧不足で力がなくてノルマができないのに更に食糧を減らせば、もっと体力が低下して仕事ができなくなる事はわかっているのに懲罰の意味でこんな仕組を取り入れているのである。

とにかく、こんな状態は特殊な日本人だけでなくウラル山中の日本人全員が味わった地獄だったのである。

このまま放置しておけば、日本人全員死んでしまふと考えたソ連の関係者達は、日本人をもう少し暖かい所へ移動させ、違った作業をさせようと考えたらしい。早速、日本人は集められた。

収容所では日本人は帰国することになったと噂が立った。

再び例の貨車に乗せられた。汽車は南下し数日後東に向かった。多くの人々は日本に帰れると疑わなかった。

しかし数日過ぎた頃、汽車は南下を始めた。二、三日後に着いた所は中国国境に近い草原のウスカメ(ウスチカメノゴルフスク)という所であった。夢にまで見た帰国の期待はあわくも消えてしまった。

中国国境から四五百キロメートル離れ一年じゆう山頂に白い雪をいただいた天山山脈が東の空

にくつきりと浮かんで見えた。前の所より日本に
ずっと近づいたという気持ちはこの山脈が冷淡に
も厳然と遮っていた。

この事実が間もなく大きな問題を惹き起こす原
因になるとは神ならぬ身、誰一人気が付かなか
ったようである。

カランチン（検疫期間）をのんびりと過ごし、
期間が終わると亜鉛工場の建設に駆り出された。
ある班は煉瓦工場で煉瓦を焼き、ある班は煉瓦を
積み、壁を塗り、ペンキを塗り、水道管を埋設す
るための坑道掘り等に従事した。私達は、この側
溝を掘る仕事をしていた。側溝は幅が七、八十セ
ンチで深さが二・五メートルであった。ここでは
冬には二メートル程土が凍るので最低そのくらい
は必要だということだった。

私は軍隊時代から仲良しだった岡さんと一緒に
働いていた。私達が掘っていた側溝がちょうど道
路とぶつかってしまった。そこで道路の幅だけト
ンネルを掘ることにして直径一メートル程の穴を

深さ一メートル程掘った。土質は砂であるため仕
事はそんなに困難ではなかった。

その日作業から帰ると身体検査があった。収容
所の身体検査というのは極めて簡単で、全裸にし
て並べておき、お尻をつまんで皮膚が沢山つまめ
る人は病弱者で、皮膚に張りがあつてあまりつま
めない人は健康者と決めるというお粗末さであつ
た。

そして病弱者と認められた者は翌日から作業を
免除され、休養が認められると共に、白パンやバ
ター等良質の食糧が与えられる。

幸か不幸か私と岡氏は二人共病弱者として認め
られ作業を免除された。

次の日私達の交代に四七一部隊の上田大尉（函
館高等水産学校、中野学校出身）ほか数人が出て
トンネルを掘っていた時、土砂が崩れて上田さん
が生き埋めになり亡くなった。今なお、申訳ない
気持ちと御冥福をお祈りする気持ちでいっぱい
です。

病弱者もオ・ペーとオ・カーの二段階があつて、オ・ペーの方がより病弱者ということでウスカメより暖かいコーカサスの農場で働くことになり、オ・ペーの一隊は私達と別れることになった。彼らと再会したのは二、三年後のハバロフスクの収容所であつた。

一方ウスカメの収容所に残つた我々にとって思いがけない事が待ち受けていた。日本人三人が作業に行く途中、前にも書いたが中国の国境の山々が近くに見え、もだし難い郷愁の思いにかり立てられた。この三人は警戒兵二人を殺して逃亡してしまつたのでした。戦前から彼らを知っていた私は、彼らの逞しい精神力と力強い行動力が、国境を越えれば中国だ、中国に入れば何とかなると考え行動に移つたらしいと思つた。

しかし間もなく捕えられ、裁判に付され、銃殺刑を判決されたというを通訳にあたつた香川さんから聞いた。

私達は、この事があつてから、ヂェズカズカン

の懲罰ラーゲリに移動させられた。着いた所は砂漠のように木らしい物は全然生えていない、近くに川が流れていたが水は緑青色をしていた。上流に銅山があるらしかった。野生と思われるラクダがのんびりと歩いてた。

ここは国境から遠く離れていて逃亡が困難だということと逃亡しても飲み水が全くない所であるということだった。水がないわけではないが、飲めば立ち所に死んでしまうという猛毒が含まれた水が流れているだけだった。それでも、ドイツ側の捕虜達が時々逃亡することがあつたが、ソ連の警備兵達は、あまり慌てないで「逃げるなら逃げるがいい、どうせ逃げきれやしない」とのんびりと構えていた。二、三日すると身動きできなくなつていた所を捕まつたとか死んでいたのが見つかったという噂を聞いた。

この収容所では、私は炊事勤務になつた。言葉がわかるということで、糧秣受領から炊事の準備、炊飯、分配、片付け等一切担当することになった。

ここで日本人達がどんな作業をしていたかあまり記憶にない。

ここで今なおはっきり印象に残っていることがある。

その一つは、炊事で使う燃料として与えられるものがおが屑であったということである。一見、何事もないことのように思われるが、実はたいへんなことであった。

大人が立って入れるような大きな釜をおが屑でお湯を沸かすことさえないへんなことで、一握りのおが屑を焚口に放り込んでうちわでばたばたとあおぎ、また一握り投げ込んでばたばたと煽ぐのである。そうしてやつとポーツと燃え上がる程度である。

こんなことをした経験のない我々は困りきってしまった。

一日かかって、この大釜を沸かすのはせいぜい一回か二回である。ましてスープを作ったりカーシヤを煮るとなると一日に一回がやつとだった。

検疫期間中は作業に出ないから、炊上がりが少々遅れても我慢してもらおうとしても、この期間が切れて作業に出ることになると、遅くとも出発前一时间に食事を済ませて安心して作業に出てもらいたかったので、不寝番を決めて夜通し火を燃やし続けた。

それでも、大人が立って入っても外からは見えないような大釜は沸騰はしてくれなかった。燃えそうなものは何でも燃やした。二段ベッドの敷板から便所の踏み板まで外して燃やして、収容所の職員に見付かって修理をしておけと怒鳴られた。

修理の為の板を日本人に頼んだ。ソ連人に見付からないように三十センチぐらいの長さに切って、シュバーの下にかくして持って来てくれたが、そんな短い板では修理の役には立たない。

そこで同じ収容所にいたドイツ人に頼んでみることにした。彼らは快く引き受けてくれた。そして、夕方には一間（一・八メートル）ぐらいの長

さの板を二、三十枚、我々の炊事場に届けてくれた。

どうして持って来たのかと聞いたら、ざっと次のようにして持って来てくれたとのことだった。

三十人ぐらいの作業班の全員が、収容所に帰る時、一人一枚ずつ板を担いで堂々と作業場の門を出ようとしたら、その所長は製品を持ち出すことはまかりならんと言って板を全部取り上げてしまった。その時、突然ドイツ人が一人倒れて、ブーブー、口から泡をふいて苦しみ出した。その時、班長は「大変だ、すぐ担架をつくれ、病人をそれにのせて、収容所へ運べ」と叫んだ。

ドイツ人達は、今取り上げられた板を全部使って担架を作り、患者をのせて作業所を出て、作業所が見えなくなった頃、患者はポイツと担架を飛び降り、担架は解体され一人一枚ずつ担いで我々の所まで届いたということだった。

こんなことがきっかけで、ドイツ人達と親しくなり、かまどの話をしたら「任せておけ」とのこ

と、どうしてくれるだろうと思っていたら、その日の夕方ドイツ人達が缶詰の空缶を沢山持って来た。夕方の配食が終わった頃ドイツ人が数人やって来て、たき口の周りを掘り始めた。どうするかと尋ねたら送風機を取り付けるための送風管を埋める工事をするためだという。ドイツ人達は二時間程仕事をして帰って行った。

次の日の夕方途方もない大きなモーターが届いた。早速連絡して始動にかかった。あのおが屑がぼうぼう音を立てて燃え出した。炊事勤務者全員の歓声が上がった。

これからは定期に食事が出せるといふ喜びと、これからはあんなに苦勞せずに済むなあという安堵の気持ちの現われであったのだ。

こうして作業隊員には作業の出發に差しつかえない時刻に食事を配ることができるようになった。

しかし、これで食事の問題は解決したわけではなかった。

前にも書いたが、この収容所は懲罰ラーゲリである。与えられる食糧は質は悪く量は少なく空腹の毎日であつたらしい。与えられる肉はラクダの尻尾や脚、たまにはラクダの肉も支給になったが、真つ赤で独特の匂いがあり、吐気を催した。半地下の炊事場の窓にはちようど膝をつく、炊事場の中が手に取るように見えるのである。そこにぎつしり南瓜か西瓜を並べたように、日本人や中国人、朝鮮人や蒙古人の顔が隙間のない程ギッシリと並んで配食の終わるのをジッと見守っている。終わつたと見るとドツと炊事場になだれ込んで来る。

残つたものは糊みたいなカーシャであるが、それを分けてくれと言うのである。中には同じ部隊の同僚もいたが、分けてやらず次の食事の準備のため湯をたたえた釜に入れてしまうのである。そして私は炊事場になだれ込んだ人達にこう説明した。

「この残つた物は、私の物ではない、皆の物で

す。だから私は、ここに来た人にだけやる訳にはいかない、皆に分けなければならぬ物だ。最も平等に分けるためには次の分と一緒に煮て分けることだからわかつて帰つてほしい」と、皆の気持ちがかかるだけに、そして皆の空腹がわかるだけに、心を鬼にして説得したが、その回だけに止まらず、毎回、毎回続いた。

それだけではなく、炊事のごみ捨て場から野菜の腐つたものや馬鈴薯の捨てた皮等を拾つて食べようと、ごみ捨て場に蠅のように群がって、食べられそうなものというものは見逃さなかつた。

また、糧秣受領の車を収容所内で襲う者さえ出る始末だつた。しかし、さすがに日本人は日本人側の糧秣を襲うことはしなかつた。日本人はドイツ側の分を、ドイツ人達は日本人側の物を襲つた。

しかし、この襲撃は、あまり成功した例はなかつた。大体襲う連中は空腹のため殆んどの方が弱り切っている、袋に入っている穀物やじゃがいもなど重くて手に負えなかつたのである。たま

に袋の口を縛ってある紐が解けてこぼれ出たものを拾うことができれば成功した方であった。

もう一つ炊事勤務者を悩ませることがあった。

それは使役であった。炊事勤務者は極力制限されていたので、炊事の仕事で手数のかかることは、例えば、鮭を切身にするとかラクダの脚や尻尾やたまに支給される肉などを下拵えするときには、使役と称して炊事の手伝いをお願いしたが、この時だけは皆喜んで手伝ってくれた。仕事をしながら食べられるからである。しかし、この人達は自分の腹を一時満たすだけでは満足しなかった。不安な食生活を満たそうとできるだけ多くの品物を特にそのまま食べられそうな鮭を一匹、二匹と小便にでも行くような振りをして持ち出し、雪の中に隠して帰って来て知らぬ風をして仕事を続け、仕事が終わるという状態が続いた。

しかし世の中はよくしたもので、炊事勤務者の中に満州国時代に馬賊をしていて日本側に投降帰順したという「許」という男がいた。彼は、どう

して見付けるのか、誰が何匹持ち出し、どこに隠してあるということをやちゃんと知っているのである。

こんな時、彼は私に「今夜の使役はたくさん鮭を持ち出しているよ」と知らせてくれた。「誰が持ち出したかわかっていたら連れて来てくれ」と言うと、間もなく三、四人の人達を連れてきた。見れば白髪混じりの年輩者だ。自分の親ぐらいの年齢好だ。自分の子供程の私の前で頭を下げて恐縮している。戦前、戦中にはきつと相当の地位にあった人にちがいない。私はたしかその時二十八歳だったと思う。うなだれて私の前に立っているのを見ると、憐れさを感じ何もいうことができなかつたが、やはり何か言わなければならぬと考え「炊事の物は皆の物なんですよ、私のものならやってもいいが皆に平等に分配しなければならぬのです。少なければ少ない程公平に分けなくちゃいけないのです。それがわかったら持って行った物を返して下さい」と言った。分かったというの

で帰っていいと言うと、いままで黙って傍で聞いていた許が「もう、それで終わりかえ？ そんなら俺が今からぶん殴ろうか？」と言うので「許さん、もうこれでいいんだ、わかったといっているから」と言つて、殴るといふのを止めさせて帰した。それ以来、使役に來ても炊事の物を持ち出す者はなくなった。

しかし収容所内では血を見ない日はなかった。空腹のためか、事によつたら日本に帰れるのがいつなかわからない精神的な不安さがさせるのか、ちよつとしたことで喧嘩になりやすかった。このような殺ばつとした不安な懲罰ラーゲリの生活が二年程続き、カラカンダの普通の収容所に移動した。私は、ここではノルマ係をした。その日の作業量を計算して報告するのが仕事だった。ここは有名な炭鉱地帯であったが、私達は主に地上勤務であった。五十五、六年前のことで経緯をはつきり記憶していないが突然収容所内の診療所勤務を命ぜられた。

患者は、日本人側の日本人、中国人、朝鮮人、蒙古人とドイツ人側のドイツ人、ルーマニア人、ハンガリア人等多くの民族の人達であった。殆んどの人達は炭鉱で働き結核にかかっていた。全員が寝たつきりであった。一人亡くなつて屍室まで運んで帰つて來ると次の人が亡くなつていくという状況であった。この診療所は極めてお粗末で医者らしい医者はいなかった。収容所と違う点は働けないように弱り切つているので作業がないことと、白パンが少し支給になる程度で、ただ死を待つているにすぎなかった。

今まで直接死んだ人をさわつたことのない私は、ここでは病人が死ぬとおそろおそろ敷布の上から足を押えたり、頭を持ちたりして担架に載せ、屍室まで運んだが、次々と亡くなると、そんなに、のんびりとしてはおられず、素手で扱うことにも慣れたといつても、死体のあの冷たい感触はいやなものだった。

このカラカンダ地区に二十程の収容所があり、

日本人とドイツ人の捕虜が主として炭鉱で働いていた。

そのため病人も多く、郊外に大きな病院を開設していた。そこには沢山の医師も看護婦もいた。

ドイツ人の軍医も衛生兵も働いていた。

ラキチャンカ、メッドヌイ、マグネットゴルスクの病院を転々と転送され、ゴリキ一の病院に居た時のことである。

初めてウラル以西のヨーロッパ的な味のある所で、病院の庭にはリンゴの木が植えてあり、葉の陰には取り残しの真赤に熟したリンゴがなっていた。一度に皆取ってしまわないで少しずつ取って長く楽しもうと話し合って、次の日に行つて見ると誰が採ったか一つも無くなつていてがっかりした。

こんな時、日本人の患者からソ連の看護婦の一人がとても意地が悪く、日本人のすることにいちいち文句を言って困るから、もう少し親切にしてくれるように言つて欲しいと、私に話があった。

私はここでも病理室勤務をしていた。そこへ、たまたま彼女が検査物を持ってやつて来た。ゆつくり話を聞いてもらうには好都合と思つて話しかけた。

「忙しいかも知れないが、ちょっと聞いてもらいたい事がある。時間を少しもらえないか」というと、「どんな用事ですか」という。そこで、日本人の患者から言われたように、もう少し親切にしてやつて欲しいと話すと、「あなたも日本人か」という。「そうだ」と答えると、「それではわけを話しましょう」と言つて、次のような事を話してくれた。

「私の兄は、独ソ戦の開戦以来、第一戦でドイツ軍と戦い、終戦までかすり傷一つ負わず元気で戦場で過ごして来た。そして独ソ戦終了後部隊はソ満国境へ移動した。間もなく日ソ戦が始まった。そして一週間も経たない中に私は兄が戦死したという報せを受けとつた。たつた一人の兄がですよ。日本人に兄は殺されたんですよ。それで、日本人

を憎まずにいられますか」ということであつた。

そこで、私は「それは大変お気の毒でした。あなたの気持ちはよくわかります。しかし冷静に考えてみてください。ここにいる日本人の誰が、あなたの兄さんだからと知って殺してやろうと思ひ銃を射つたでしょうか。そんな事は誰も知らないし、兵隊は上官の命令で動くもので、あなたの兄さんだからということでは銃を射つたのではない、憎むとすれば日本人の兵隊ではなく日本人の為政者であろう。しかし日本人にすればソ連が憎い。なぜなら、ソ連は日本と不可侵条約を結んでいたのに、一方的に破棄して、攻めて来たんだから。戦争は個人の喜怒哀楽を超越して、二国間の利害関係から起こるものだ。日本軍の兵隊が、あなたの兄さんを憎いと思つたのではなく、日本兵が射つた弾丸が真つ直ぐに飛んでいった先に、たまたまあなたの兄さんが居ただけなんだ。戦争が終わつた今、憎しみ合つたつて、兄さんが生き返るわけじゃないじゃないか」と言うと彼女は「よくわ

かりました」とうなずいた。

それから、彼女の日本人に対する態度は、がらつと変わった。日本人の重病の患者が支給される食事が口に合はず食べないと、彼女は家からその人に食べられそうな料理を度々作つて来て日本人の患者に食べさせるようになった。さらに、日本人の患者が編物や刺繍をしていると、その傍に腰掛けて見ていたが、しばらくすると編み方を教えてくれといつて自分も習ひ始めた。

私達がギリキ一の病院を離れる頃には相当じょうずに編めるようになっていた。

そして、いよいよ出発の日には、悲しそうに日本人を見送つていた。

ハバロフスクへ

我々を乗せた貨車は、東へ東へとシベリア鉄道を走り続けた。

事によると帰国できるかも知れないというような淡い希望を持たせながら二十六日程走つて貨車

はハバロフスクで止まった。貨車から降り、収容所に運ばれ、今まで抱いていた夢は破れてしまった。

しかし、ここには沢山の日本人がいた、その事だけでなぜかほっとした。

ところが、ここハバロフスクでは、思いもよらぬ事が我々を待ちかまえていた。それは軍事裁判であった。終戦直後から、ウオロシーロフをはじめ、行く先々で取り調べを受け、しかも特別ソ連に対して敵対行動を取ったわけでもないのに、あの程度で終わりかと思っていたのであった。

抑留されて五年程経ってからの事である。

間もなく、私達はハバロフスクの監獄に移された。まず入口の一室で身体検査と所持品の検査を受けた。頭髪はバリカンで短く刈られ、その外、毛と名の付くものはきれいに剃り落とすのである。

所持品検査はたいして苦にはならなかった、というのは検査しても今までのラーグリ生活で目ぼしいものは取り上げられ、所持品らしい物は何一

つ残っていなかったからである。

一緒に入って来たソ連人の所持品の検査を見ていて驚いた。交換用にでもと思って持って来たらしい新品の靴を調べていた看守は、鋭利な刃物で靴の底を縦に真二つに切り開き、その中を入念に調べるのであった。その靴はもう靴としての値打ちを失っていた。

シャワーを浴びて、部屋に連れて行かれた。中央を通路にして鉄製の二段ベッドが五台ずつ並んでいた。敷布と枕覆いがやけに白く見えた。

ソ連の囚人も一緒だった。沿海州の監視哨でアメリカの飛行機の侵入を見落としたとか言っていた。

私は、どうしたわけか、その部屋のスタルシー（昔の日本流にいえば牢名主）にされてしまった。ソ連の監獄では何枚も重ねた畳の上で威張っているなんてことは許されない。

別に特権らしい特権はなかったが、ただ一つだけあった。それは食事に支給される物が一般の人

の二倍貰えることだった。カーシャもスープも二倍だった。しかし、それも皆で分けて食べてもらった。

私は、日本の刑務所（これは受刑者の生活を知るための見学）、中国の刑務所、そしてソ連の刑務所と三カ国の刑務所に入ったことがあるが、中国の刑務所は南京虫の大軍に悩まされ、それにくらべてソ連の刑務所は清潔であったが、刑務所に入っている人々は異口同音に「腹がへってたまらない」ということだった。ソ連人とこのことについて話したら、綺麗で仕事がなく腹いっぱい食べさせたら刑務所がたちまちいっぱいになってしまう。刑務所に入れられたら腹がへって仕方がないという事が刑務所入りを防ぐただ一つの防止策であると話してくれた。

ともかく、そんな刑務所から日本人が次々と軍事裁判所に呼び出され物々しい警戒裡に連行され、長い歳月をかけて作成された調書に基づき判決が下されるわけである。殆んどのが二十年から二

十五年の強制労働で、ごく僅かな者が十年か、または死刑であった。

一方、死刑の判決を受けた者には控訴がゆるさされ、控訴した者は再審の結果十年か十五年に減刑された。

しかし、二十年から二十五年の判決を受けた者には控訴は許されず、判決通りの服役をしなければならなかった。

私に対する起訴理由は、「対ソスパイ活動」をした廉かどという事である。

私は、あくまで露語教育隊の卒業生で通訳要員であるという事を繰り返して述べてきた。

しかし、ソ連の裁判官は「軍人の通訳はいらないはずだ。日本には通訳だけなら東京外語、大阪外語、天理外語その他各大学の文学部ロシア語学科卒業生達が十分その任務を果たすことができる」と言うのであった。

私は反論した、「学校を出ただけで弾丸の飛び交う戦場で斥候や通訳ができるんだったらどこの

国にも兵隊はいらなくなるはずだ」と。なお私は続けた。「国境を接する国の言葉を研究し合うのは世界中の常識で、あなたの国にも日本語の話せる兵隊が沢山いるはずですよ」

前段の反論に対しては何の返事も帰ってこなかったが、後段については「我が国にはそんな者は一人もいない」とかえってきた。

後日、ソ連の方々の収容所で日本語の話せる将校や兵隊に会うのには苦労はしなかった。

結局、私はソ連刑法第五十八条の一項により、強制労働二十二年という刑が言い渡された。私と同じ部隊で同じ階級で、同じ内容の仕事をしていた後任の岡氏が私より少し前に裁判を受け、二十年の刑を受けたと本人から聞いていたので、私にも同じ程度の刑が言い渡されるであろうと覚悟していたが、裁判所に出頭してみると、私への判決は「スパイ活動をした科により、強制労働二十二年に処す」との事だった。期日は昭和二十五年の九月八日だったと思う。

参考に、ロシア共和国刑法第五十八条の一部をのせておく。

第五十八条一項 a 祖国への裏切、ソビエト社会主義共和国連邦の軍事力、その国家的独立または、その領土の不可侵性に損害を与える行為、たとえばスパイ行為、軍事的または国家的機密の漏洩、敵軍への投降、国外への逃亡は左のごとく処罰する。

最高の刑罰 銃殺、及び全財産の没収。
但し軽減事情のある場合は、十年の自由剥奪。
但し全財産の没収を併科する。

第五十八条一項 b 右の行為を軍人が犯した場合は、最高の刑罰、全財産の没収を伴う銃殺に処す。

というものである。

私はだまって判決を聞いていた。すると、裁判長が、判決を聞いて何か言う事はないかと尋ねた。

「別がない」と答えると、裁判長は「何か言うことがあるだろう」と重ねて尋ねた。

「別に言うことはないが、そこまで言うなら言うことが無いわけではない」というと、「それは何か」といったので「ありがとう」と言いましよう」と答えた。

裁判官は次のようにいった。

「私は二十年程、裁判官をやっているが、懲役二十二年の判決を言い渡して『ありがとう』といわれたのは初めてである。あなたは馬鹿か気狂ではないのか」

私は次のように説明した。

「私だつて言いたくありません。しかし、あなたが無理に言えとるので言ったまでだが、根拠がないわけではない。日本にはヤクザという組織がある。その組織には箔が付くという言葉がある。その意味は、組織や幹部のため、交代して犯人の替玉となり刑を受け、その刑が重い程、組の為に大きく貢献したとして、出所後、組の中で重く用いられ、幅を利かすことができるそうです。日本では、二十二年の刑を受けたといえ、日本に帰

ったとき相当箔がつき、ヤクザ社会にでも入れれば、たちまち幹部になれるでしょう。あなたのお陰でね。そんなわけで『ありがとう』と言ったんだ」

と言うと今度は裁判官がだまり込んでしまった。刑が決定すると強制労働ということで収容所に回された。

私は、判決文を日本に帰ったら知人や友人や家族に見せようと思ひ、肌身離さず身に付けていた。二、三年して開いてみたら、汗による適度の湿度と体温で、紙は性を失ってボロボロになってしまつて、皆さんに見せられないのが残念である。

話題は変わるが、ハバロフスクの作業場で働いていた時、作業場内の各職場に馬車にのせたドラム缶に水を入れ、水を配つて回るソ連の少年がいた。その少年は少しの暇を見付けては地面を平らにして何か一生懸命書いていた。何をしているのかと、不思議に思ひ、そうつと覗いてみると、方程式を熱心に解いているのである。「そんなに勉強したいなら、学校へ行けばいいじゃないのか」

というと、「俺はだめなんだ」と半ば諦めたように、力なく答えた。

「どうして、だめなんだよ」「どうしても」という問答の末、「これを見ろ」と身分証明書を見せてくれた。私はそれを見て驚いた。この少年の祖父は帝政ロシア時代に県知事をしていたことが記録されていた。

この少年の説明では、ソ連では十六歳の人は全員、身分証明書を持ち、その記載事項には革命前の職業が書かれていて、ロシア時代の高級官吏、高級軍人、地主や財界人の子孫は上級の学校には行けない制度になっているとのことであった。説明を聞いて私は、この有能な少年に限りない憐れみを感じた。

病院勤務をして

私は、作業に出るようになって、間もなく体の具合が悪くなつて診断を受けに行った。軍隊時代湿性肋膜炎で入院して半年程治療を受けた事と収容

所でも具合が悪かったが受け付けてくれなかった事を話すと、入院しろということになった。

しかし、二週間程経つと、もう良くなったから退院して病院で働けという。

当時、病院では、ソ連の軍医が回診に行つても日本人は自覚症状を訴えるのにロシア語が話せる者がいないので困っていたようだ。

私は、ギリキーやマグネットゴルスクの病院にいた時、ドイツの医者から病理検査の方法を習い各種病原菌の検出、血液検査、糞尿痰の検査等から患者への注射、投薬まで任されていた。特にソ連の医者や看護婦がうまくやれないような細い血管に注射するのが得意だった。

病理試験室には、ソ連の女の中尉（衛生中尉）と中国人の王さんという医者と私の三人が働いていた。

初期には、病院に日本軍の小川軍医大佐と金沢一久さん、山本昇栄さんという三人の医者と内藤さんという歯科医がいた。その他、数人の衛生兵

(サニタール)がいて病院内の掃除、洗濯、配膳、病院の修理、屍体の運搬、埋葬等病院として必要な仕事は、この人達に任されていた。

しかし、収容所の作業強化の方針により病院にもその余波が押し寄せ、金沢さんも山本さんも作業に出るようになり、ソ連側の職員は院長がリトワーク軍医少佐で、もう一人グレービッチという女の軍医少佐がいた。看護婦は数人いた。

私は、ある日のグレービッチ少佐の回診に同行した。七三一部隊の堀田中尉という重病患者がいた。彼は相当重症な心臓病患者であった。彼を診断していたグレービッチ少佐は「堀田、具合はどうか」と尋ねた。堀田は「心臓が苦しい」と答えた。少佐は「今までどんな薬を飲んでるか」と聞いた。堀田は「ジキタリスを飲んでます」と答えた。

グレービッチ少佐は「ジキタリスを飲んで効かなければ、ストロファンチンしかない。溝口、堀田にストロファンチンを射ってやりなさい」と言

った。一通りの回診が終わって、早速私は、堀田氏に注射をしようと思ったが、ここでちよつと躊躇した。というのは私はいろいろの注射をしたことはあったが、ストロファンチンを射った事がなかったもので、その使い方不安を感じたのである。私は、日本の軍医の使う医学書を調べてみようと考え、調べてみて驚いた。

ジキタリスとストロファンチンは配合禁忌(医学用語で同時に服用してはいけない事)で、もし同時に使えば服用した人は即死すると書いてあったのである。なお、ジキタリスを飲んでるときは最小限一週間をおいてから注射しなければ死ぬと書いてあったのである。

驚いた私は、すぐ医者達の詰所に出かけ、そして、私は、ドクトル達にこう言った。

「私が、これから言う事は患者の生命に係わることであるので、だまって終わりまで聞いてほしい」と前置きして「ドクトルはさっきの回診の際、堀田に、ストロファンチンを注射するようにいっ

たが、ジキタリスとストロファンチンが配合禁忌であるという事を知って処方したのか、まずお聞きしたい」と尋ねた。

グレービッチ少佐は声を荒立てて言った。「私は、三十年、医者をやっている、その間、この処方をして何人かの患者を助けた事はあるが患者を殺した事はない。医者でもないのに何を言うのか」私は、そこで静かに言った。

「日本の医学は、ドイツから学んだものだという事である。世界の医学をリードしているのは、ドイツ医学であると思いますが、たいへん失礼な言い方であると思いますが、ソ連医学も、ドイツ医学から学ぶ所が大きかったのではないかと思います。そうすると出所が同じであるわけであるから薬の使い方も同じであると思うが、どうでしょうか」

今まで、だまって聞いていた院長リトワーク少佐は、看護婦を呼んで「スプラボチニックを持って来てくれ」と指示した。

間もなく看護婦のニーナーが部厚い本を数冊持って来た。

院長リトワーク少佐は、その一冊を取り出し、頁をめくっていた。見付からないのか別の本を取ってまた探していたが、どうも見付からないらしい。本を閉じて、リトワーク院長が口を開いた。

「溝口、聞くれけれど、日本の本には本当に配合禁忌だと書いてあるのか」。

私は答えた。「院長、出ているんです」。院長は言った。「その処方を取り止めるにする」。

グレービッチ少佐は不服だった。「院長、あなたは、捕虜であり、医者でもない日本人の言う事を信じ、医者であり、同じ国の私の言うことを信じないのですか」。

リトワーク少佐は言った。「私が院長です。院長として、その処方は取り止める」とはっきりと決断を下した。

グレービッチ少佐はブツブツ言っていたが、結局は院長の指示に従わざるを得なかった。

次の日、医務室に行ってみると堀田氏の病床日誌には、昨日の処方を書いた部分の上に大きな白紙が貼り付けてあった。

グレービッチ少佐と会ったので、少し意地悪く「ドクトル堀田へのストロファンチンはどうしましようか」と聞くと、「溝口、堀田のようにジキタリスを飲んでいる患者にはストロファンチンを注射するには、ジキタリスの投与を一週間止めてからでないと射ってはいけないんだよ」と、私が昨日いったとおりに、そして自分が、何を言ったのか忘れてしまったかのように白々しく答えるのであった。私は、日本人の患者が一人命を落とさずにすんだ事に安堵した。

そんな事があつてから一カ月程経つたある日のこと、医者部の部屋が笑い声で賑わっていたので何事かと覗いてみた。

すると机の上にコップが置いてあり、例のグレービッチ少佐と看護婦ニーナーが何事か話し合っていたが、私を見ると「溝口、これが何か知って

いるか」とコップの中の物を指した。「もちろん知っている、ヒルでしょう」と答えると、例のグレービッチ軍医が「溝口、明日から作業隊員がぐうんと増えて、患者がずうと減るよ」と笑顔で言うのである。

「どうして患者が減るのか」と聞くと、「日本の患者は、大部分が高血圧患者である。ところで、このヒルを耳の部分につけると血を吸って高血圧がなおるのだ」という。

たった五匹のヒルで高血圧患者が何人治せると考えているのか、おかしくて仕方がなかったが、結果を待つことにした。

五人の患者に一匹ずつヒルをつけて帰って来た。二、三分も経つたかと思う頃、看護婦が医者部の部屋に慌てて入って来て言った。

「ドクトル、日本人がヒルがまだじゅうぶん血を吸わないうちに取って捨ててしまいました」とご注進に及んだ。

「何たる連中だ、病気が治って作業に出るのが

嫌だものだから取って捨てたんだろう、きつとそうに違いない」とグレービッチ少佐が憎らしそうに言った。

特別、ヒルについて詳しい知識を持っている訳ではないが、農家に生まれ田畝いや田植えをやりながら、ヒルに悩まされた経験がある私は、だまっているわけにはいかず、「ドクトルと看護婦に聞きますが、日本人がヒルが血を十分吸わないうちに取って捨てたといいますか、一体ヒルは一匹で何グラムぐらい血を吸うと思っているのですか」と聞くと、看護婦ニーナーが忠義面して「私は看護婦養成所で一匹のヒルが二百グラム血を吸うと習った」と言った。するとグレービッチ少佐殿「そうだ、二百グラムだ」と合づちを打った。

日本人なら殆んどの人がヒルはせいぜい一グラムか二グラムしか吸わず、それだけ吸えばひとりで離れる性質を持っている事を知っている。二百グラムというのは普通のコップ一杯の量であることを思えば、馬鹿馬鹿しくて反論する気にもな

れず、私は次のように言った。

「ドクトル、ヒルがそんなに効き目があるなら、あなたは どうしてスターリンにヒルを使うことを勧めませんでしたか」。しかし返事は帰って来なかった。

私達が病院でこんな事が話題になっっている少し前、ソ連の最高責任者である、かの有名なスターリンが脳溢血で亡くなったのである。

こんな日々を送っていた私は、事ごとにグレービッチ少佐と衝突する羽目になり、とうとう作業に駆り出されることになった（お前は日本人の肩ばかり持っていて誠にけしからんということ）。作業に出されても、他の人々が長い抑留生活で何らかの特技を身につけていたが、私は、主に病院と炊事の勤務が長かったので特技を持たなかったが、軍隊時代から気の合った岡さんが、同じ仕事をやらないかと誘ってくれた。仕事は彫刻で原型を作るのは芸術的素質が相当要求される。こんな時は、よくしたもので、北海道出身の山田四郎さ

ん（ローマオリンピックの日本のスキーマの選手）と岡さんというこの二人が上手で殆んど原型は一日か二日で仕上げてしまうのである。ソ連のノルマ制度というのは、ご承知の人も多いと思うが、この原型造りは一個で三十日分に相当した。だから一個造れば一カ月殆んど遊んでいても三十日働いたことになるのである。しかし四人の班となれば、それだけではノルマを達したことはならない。

原型を使って、石膏を流して製品を次々と造り上げていくのである。

ソ連には、社会主義競争という事がある。これは生産活動をソ連全土で同じ計画で同時に着工、どこが成績が良いかを競争することであった。

例外なく日本人作業隊もこの計画の中に組み入れられ、二百七十二企業体に所属していた。十年以上も同じ作業をしている日本人達は全員が熟練工の域に達していた。この日本人が、こつこつと働くのであるから、成果が上がらないはずがない。

ソ連の全国紙は二百七十二作業場の素晴らしい成績を「仕上がりも綺麗、材料も節約され進度も他の作業場をおさえて抜群に速い」と報じていた。

しかし、この報道内容は、ソ連人には「二百七十二企業体というのはよく働く連中だなあ」と思わせるぐらいのもので、まさか日本人がソ連で一番成績を上げているのだと思う者はいなかったであろう。

それに反して、日本人達は、二、三百人が新聞を取っていたので、自分達の仕事ぶりがソ連で一番高く評価されていることを知っていた。

しかし、権威ある第三者が日本人を高く評価しているのに反して珍らしい現象が起こった。というのは、日本人の成績が上がれば上がる程、給与が下がるのである。

その内幕は、ソ連の様子を知らない人には理解し難いが、ソ連は独立採算制がお好きなようで、日本人の成績が上がれば上がる程ソ連人の、監督、指導の役職にある者には存分の報償が与えられ、

その立場にある者にはほくほくであったが、ソ連人にプレミアが出されれば出される程、日本人の手取りが少なくなるという皮肉な状況になってしまったのである。

一方、収容所に残っている者にも労働を強化しようとする傾向が出てきた。

高齢者や病弱者で入院する程でない者には麻袋修理を軽作業と称して課していた。麻袋修理とは、メリケン粉袋や砂糖袋の破れやほころびを繕う作業である。ところが日本人の器用さと勤勉さから、この仕事なら相当の収入があがった。

成績が上がれば、収容所は金が儲かる。金が儲かれば、もっと儲けたいくなるのは人の常である。収容所側は、この仕事にますます多くの人を投入するようになり、果ては危険な高血圧患者までもこれに投入するようになった。そのため作業中昏倒し間もなく不帰の客となった人も二、三人に止まらなかった。

また、ソ連軍医は発熱や外傷によって作業休を

与えた者に対しても、入院でない限りは殆んどすべての人に臨時にこの麻袋修理を命じた。しかもこの麻袋班長には、ソ連側に最も忠実だった中国人を当てていた。これこそソ連人一流の異民族の相剋利用の政策であった。

こうして増加したこの作業の人員は、遂に二交代の職場に収容することができなくなり、夜間作業を含む八時間三交代制すらとるに至った。

この深夜作業はおそらく営外作業に出ている比較的若い人や比較的健康な人にとってすらなお耐え難い苦痛なものであったと想像される。ましてこれに従事したのはいずれも病人や老人であるというに至っては、また何をか言わんやである。

これが夏の時分で戸外の日陰で仕事ができるというのであればまだしも、一度冬にでもなれば、閉じ込められたバラックの中でやるのであるから、空気の汚れたるや全くもってお話にならない。

一般ソ連人収容所では、乾燥室、浴場、洗濯場の勤務は重労働として体位一級の者が従事する規

定になっているが、日本人収容所ではいずれも三級の老人達がその勤務につけられていた。また病院や医務室の衛生兵は平日でも十四時間以上で、その上に重病人でも出たら徹夜勤務になってしまふのに、その勤務員はいずれも営外作業不適の病弱者かもしれない現に長期療養を受けている者達が勤務を代行していた。

以上の外、数々の原因を内に蔵して、昭和三十年十二月十九日、ハバロフスク事件が起きた。(事件発生の遠因から終末までの詳細を記すには紙面の都合があり、ここでは省略させていただくことにする。なお、概要を記すにとどめ、この事件については既刊の『朔北の道草・無抵抗』等の一読をお勧めします)

ハバロフスク事件の発端は、ソ連の不当な労働強化の要求であったが、闘争の方針としてソ連中央政府そのものを攻撃せず、現地官憲が中央の意図に反して日本人抑留者を不当に取り扱っているとし、実情を中央に訴え、当時ロンドンで行われ

ていた日ソ交渉を背景にして、待遇改善をかちとろうとして作業を拒否の運動を展開しました。

現地官憲を相手とせず、専ら中央との交渉を求め、最高幹部会議議長や赤十字社社長に対する請願、タス通信、ブラウダ、太平洋の星等各新聞社に対して真相の報告など精力的に行いましたが、なかなかその効果は認められませんでした。

そして、遂に二月の末に至り、中央より直接責任者の来所を要請するため健康者五百余人のハンガーストライキ決行を決定することになりました。「ハンスト」に入ってから数日後、遂に来るべきものがやってきました。

三月十一日の未明、モスクワから派遣されてきたボチコフ中将自ら指揮する二千五百人のソ連兵によって「スト」鎮圧が開始された。

収容所の高い板塀と数条の鉄条網が数か所で破壊され、そこから雪崩のごとく着剣したソ連兵が突入してきた。

「敵襲！」という我が方の不寝番の叫び声に全

員が飛び起きた。

この時収容所の外周には、無数のトラックや数台の消防車や救急車が待機しており大規模な作戦体制であった。

日本人は全員寝台から動かない。部屋の入口に立ちはだかった中佐は「ソ連邦内務次官ボチコフ中将命令、日本人は、ただ今より各自の荷物を持って戸外に整理せよ。十分間の猶予を与える」と声高に宣言し、通訳が直ちに日本語でこれを伝えた。それとともに、どこに備え付けてあるのか、数個の拡声機から同一文句がけたたましく繰り返して聞えて来る。

中佐の「誰も出ないのか」という怒声が発せられるや、今まで戸外に鳴りをひそめて待機していた数十人のソ連兵が乱入して来た。部屋に入るやいなや、やにわに寝台の上の日本人を担ぎ出しにかかった。絶対無抵抗を申し合わせていた私達である。柱にしがみついて拉致を防ぐより外はない。それでもなおこれを戒めるように「手を出すな」

「手を出すな」「抵抗するな」と日本人相互の悲痛な叫びが発せられた。入口近くの仲間二、三人が早くも戸外に担ぎ出された。

結局、日本人集団は全員外に運び出され、四か所に分割収容されたが、石田さん、瀬島さん（前第二臨調委員、現臨教審委員）等を中心とした日本人代表とボチコフ中将との交渉、四か所ごとの日本人集団とボチコフ中将との交渉が行われ、現地官憲の一方的報告の誤りと日本人集団の真意が理解されたようで、ソ連側の現地責任者は逐次更迭され、日本人に対する待遇は見違えるように改善された。

この間、一糸乱れぬ闘争を指導し、精力的にあらゆる手段を尽くされた代表の方々には今なお感謝している。

なお、この作業拒否の間、社会主義競争の成績はガタ落ちになった。新聞紙上では「二七二作業場はどうしたか、今までの成績からは今の成績は想像もつかない。不振の理由を責任者は明らかに

せよ」と書き立てていた。

数回して、その回答がイズベスチャ紙にのっていた。「今まで働いた作業員は全員が熟練者で仕事にも熱心であった。交替したのはコムソモール（青年共産党員）で前の人達程作業に熟練していないし熱心でもない」と現場責任者の発言である。一般ソ連人にとってこの種の記事は、何の変哲もないどこにでも転がっている記事である。

しかし、前にも書いたが、二七二作業場の作業員は日本人である。前のイ紙の記事の作業員を「日本人」と読み替えてみるとはつきりしてくる。

即ち、「今まで働いていた日本人全員は熟練者で仕事にも熱心であった。交替したのは青年共産党員であるが、日本人程作業に熟練していないし熱心でもない」と現場監督が全ソに向かって発表していることになる。

こうして、ハバロフスク事件が決着しても、我々の作業は九カ月余り続いた。それでも三十一年の十二月になると、やっと今までと違った帰国でき

るらしいという気配が感じられるようになった。

今までの輸送はすべて貨車か囚人護送車であったが、ハバロフスクからナホトカまで初めて客車に乗せてもらった。ナホトカ港は港一面凍りついていた。迎えにきてくれた興安丸は船の形をしておらず、まるで大きな雪の塊であった。しづきが船体に凍りついてこうなったが、日本に着くに従い白い船体のはつきりとしてきた。

懐かしい日本の緑の国土が見えて来た。誰一人涙を流す人はいなかった。喜怒哀楽につれ涙を流すような繊細な神経はすり減ってしまっていた。

私達は昭和三十一年十二月二十六日舞鶴港に上陸、十六年ぶりに日本の土を踏んだ。

この原稿を書き終えたのは二月二十三日の朝であった。

ちやうど、テレビでは、連続テレビ小説「心はいつもラムネ色」を放送していた。八月十五日の内地の文平親子の驚きと悲しみと喜び、そして一

方、チチハルでの文平を団長とする慰問団の敗戦
に対する落胆と無気味な未知のソ連軍の行動に対
する推測から生じる不安の表情が四十年前のあ
日の日本人のあまりにも複雑な感情を蘇らせてく
れた。

続いて放送されたのが中国残留日本人孤児を探
す手がかりであった。

あまりにも奇しき因縁に驚くと共に、今次大戦
で亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りし、
日本人孤児については一人でも多くの人が長い間
夢見た肉親との再会を果たせることを祈らずには
いられない。

【執筆者の紹介】

大正七年十一月二十九日 千葉県君津郡佐貫町笹

毛に生まれる

昭和十五年三月二十二日 千葉県立千葉師範学校

卒業

昭和十五年四月一日 千葉県君津郡環尋常高等小

学校に勤務

昭和十六年二月一日 歩兵第五十七連隊に入隊

昭和十七年十二月一日 満州第三四五部隊派遣

昭和十九年七月二十六日 関東軍情報部付となる

陸軍少尉任官

昭和二十年八月二十三日 ハルビンにおいてソ連

軍に收容される

昭和二十年九月十三日 ウオロシロフ收容所

昭和二十一年一月六日 ウラル地区タウダ收容所

昭和二十一年四月十日 ウスチカメノゴルスク収

容所

昭和二十一年十月十三日 シスガスガン收容所

昭和二十二年七月二十一日 カラカンダ收容所

昭和二十三年八月一日 ラクチャンカ特別病院

昭和二十四年五月七日 ウスター特別病院

昭和二十四年十二月二十日 ホール特別病院

昭和二十五年一月五日 ハバロフスク第十六地区

收容所第十八分所

昭和三十一年三月十一日 ハバロフスク第十六地

区収容所第二分所

昭和三十一年十二月二十一日 ハバロフスク第二

分所出発

昭和三十一年十二月二十六日 ナホトカ經由舞鶴

帰還

昭和三十二年一月一日 千葉県君津郡天羽町立環

小学校に復職

昭和三十八年四月一日 千葉県君津郡天羽町立関

豊小学校教頭

昭和四十五年四月一日 千葉県君津郡大貫町立大

貫中学校教頭

昭和四十六年五月一日 千葉県富津市教育課長

昭和四十九年四月一日 千葉県富津市立吉野小学

校長

昭和五十一年四月一日 千葉県富津市立大貫小学

校長

昭和五十四年三月三十一日 定年退職

昭和五十四年四月一日 千葉県富津市教育委員会

社会教育指導員

昭和五十四年十二月一日 千葉県富津市民生委員
現住所 千葉県富津市湊

溝口菊雄さんは全抑協富津支部設立当初より参加され、指導者として良く支部を導いてくれました。

ソ連抑留記を内容とする書はたくさんあるが、同じ市に住む抑留経験者だけで出版することができれば、意義深い事ではないだろうか、支部総会で決議し、溝口さんはその編集委員に選ばれ、二カ年間大変努力され、三百余ページのりっぱな本を造ってくれました。

(千葉県 伊藤 千次)